



第58回「おかねの作文」コンクール

秀 作

夏野菜と、苦い味

兵庫県・加古川市立氷丘中学校 3年 池上 由麻

祖父の家には、小さな畑がある。そこで彼は、真心を込めて懸命に野菜を育てている。

我が家は、毎年お盆のシーズンとお正月に九州に住んでいる母方の実家に帰省する。私は、この年に二回きりの祖父母との再会が嬉しくてたまらない。だから、今日は皆でお出掛けだけれど、せっかく一緒に居られる時ぐらいと思い、早く起きて畑を手伝った。

「くんちゃんのピザ、めっちゃ美味しかったな。」と、まだ昨夜の余韻に浸っている。“くんちゃん”こと祖父は、コロナ禍をきっかけに料理に目覚めたらしく、その材料を集めるために本格的な家庭菜園を始めたのだ。食卓にずらりと並んだ窯焼きのピザの数々、色とりどりの夏野菜パスタ、濃厚なかぼちゃケーキなどの絶品がよみがえり、思わずお腹が鳴りそうだ。また、それほどの品々を作るには、相当な時間と努力が必要だろうに、その苦労を感じさせない祖父の姿には本当に感心する。そして、そんな彼は今もなお、タオルで汗を拭いながら黙々と作業を続けている。その献身的な姿勢を受け、おっといけない、と私も野菜の収穫にとりかかった。

麦わらバスケットには、太陽の光をたっぷりと浴びて育った、大ぶりの鮮やかな野菜たちが顔をのぞかせた。見るからにしてみずみずしく、すぐにでもかぶりつきたい気持ちになった。私はすっかり満足し、早速家に戻ろうとすると、何やら祖父がそれらを謎の木箱の方に持っていくではないか。私は驚き、「くんちゃん、それ、どうするん。」

と聞くと、

「売るんだよ。夫婦二人じゃあ、食べきれないから。まあ、一つ100円もしないけどね。もちろん、由麻たちの分もあるから安心しなさい。」

と、答えるのだった。“いやいや何を言っているのだ。こんな立派で大きな野菜を100円なんかで売ったらとんだ損じゃないか。お人よしにも程がある！”と思い、

「そんなことして大丈夫なん!? しかも、無人販売なんか、お金とる人もおるんじゃないん。」

と言い返したけれど、全然平気だ、と言わんばかりに笑って流された。

私は祖父のことが心配になった。そこで、もしきちんとお金を払っていない人がいたならば、それを教えてあげようと考えた。複雑な気持ちを抱えながら、私は目的地までの車窓に揺られ、野菜とお金の安否を祈った。

帰宅するなり確認すると、予想以上に売っていた。が、ふたを開けてみるとやはり2、3人は代金を払っていない。言うべきかどうかは悩んだけれど、私はそのことを伝えた。すると祖父はこう言った。

「うーん。やっぱり盗られとったか。そんな人はいないと信じてたから、少し悲しいね。まあ、仕方の無いことだ。」と。

私は胸がしめつけられるような気持ちになった。最初から疑ってばかりの私とは違って、祖父は買い手のことを心から信じていたのだ。そう思うと何だか切なく、申し訳ない事実を突きつけてしまったのだと感じた。そして、その時の祖父の悲しげな表情が、私は今でも忘れられない。

この出来事を通して、お金のやりとりというのは、圧倒的な信頼関係の上に成り立つものだと実感した。私たちは、日常生活の中で当たり前のようにお金を使って買い物をしたりする。しかし、考えてみれば、それは単なる数字が書かれた紙きれやコインにすぎない。それでも社会からお金という概念が無くならないのは、人々がそれを価値あるものだと認め、信じているからだと思う。だからこそ、その信用を裏切るような行為は許されないし、決してあってはならないことだと強く感じる。

逆に、今までして得たものに、その代金と等しい価値はあるのだろうか。つまり、そこには目には見えない精神的な豊かさが秘められているのではないかとも考える。だから、この件だけに限らず、自分のお金の使い方や価値観を今一度見つめ直し、誠実な態度で向き合うべきだといえるだろう。すると、おのずとより豊かで気持ちのよい生活や、人間関係を築いていけると私は思う。フェアで真摯なお金のやりとりによって、社会に笑顔の輪が広がっていくことを願う。そのためにも、私自身もお金を大切に扱うようにし、周りの人から信頼してもらえるような言動を心がけていきたい。